

# 東アジアにおける文化の「域際化」

— 「韓流」現象を中心に—

羅 京洙

## はじめに

本稿では、今日の東アジア地域における文化のトランスナショナルな移動と交流という事象に焦点をあてる。とりわけ、1990年代後半から東アジアに広まりつつある「韓流」(Korean Wave)という文化現象の実態と本質についての検討を行う。また、域内における人と文化の移動現象を説明するために、「域際」という概念を用いることを本稿では試みる。

筆者は意外な場所で韓流を発見する。学習院女子大学近くにはまだ下町文化を残す店が何軒かある。「三朝庵」もその一つで、江戸時代から続く、知る人ぞ知る老舗の蕎麦屋である。食文化が人々のメンタリティーに及ぼす影響は言うまでもない。韓国人が海外旅行から帰国してキムチ鍋を求めるように、まず蕎麦を食べる日本人も多いだろう。しかし、いつからか、この三朝庵の壁に、イ・ビョンホンなどの有名韓流スターのポスター写真が貼られるようになった。日本の伝統食文化(とくに江戸文化)である蕎麦と、韓国の現代大衆文化である韓流との「出会い」が筆者にはなぜか理解し兼ねて、お店の人に尋ねてみた。それは、家業を継いでいるおばあさん(78歳・4代目)の「趣味」であるという。三朝庵のおばあさんがいかなる経緯で韓流と縁を結ぶようになったのか。また、なぜ、韓流という文化に魅力を感じるようになったのか。蕎麦と韓流の出会いを果たしてどう解釈すべきであろうか。本稿では、蕎麦屋のおばあさんによって抱いた、こうした韓流に対する本質的な問いへの“ヒント”を模索する。

## 1. 「韓流」という現象の台頭と展開

韓流という言葉が広く知られてから、2013年現時点ですでに15年ほど経つ。この言葉が初めて登場したのは1990年代後半にさかのぼる。この用語は韓国で作られたものではない。1999年、韓国大衆歌手の中国公演の際に、中国のマスコミがその熱気を大々的に伝えることによって作られた造語の「韩流」(Hánliú)がその始まりとされてきた。しかし、韓国・毎日経済新聞社編『韓流本色』(韓国語、2012年)によると、韓流という

用語は1997年の時点ですでに台湾で使われていたという<sup>1</sup>。2000年2月1日に、韓国の人気グループであるH.O.T.の北京公演を、中国のマスコミが「韓流が中国を強打した」と大きく報じ、この用語が公式化する決定的な契機になった。韓国に伝えられたのはその後である。この時期を境に、香港と台湾における韓国大衆文化への高い関心が中国国内の韓流熱風に火をつける結果となった。香港と台湾は、社会主義体制の中国と違って、資本主義に基づく文化交流が進んでおり、韓流文化が流れる仲介地（portal）の役割を果たした。

韓流は、こうした中国を手始めとして、その後はベトナムを拠点としつつ東南アジアへ流れ、2003年にはドラマ〈冬のソナタ〉を契機に日本にも上陸した。韓流の東アジアにおける広がり方の様相を楕円型の「壁時計」に喩えたい。韓流の時空間的動きは、朝鮮半島をその震源地とし、中国、東南アジア、日本列島の順に円形を描きつつ、時計回りの逆方向へと展開された。日本は、韓流という壁時計の短針が「3時（東）」を指す地点に位置している。こういった意味から、日本は、韓流文化の受け入れにおいて「後発走者」である。他にも、韓流は、モンゴルや、ロシア、中東、北南米、ヨーロッパなど、全世界のあらゆるところへ広がっていると報告されている。

それでは、韓流という文化の磁場はどこまで及んでいるのだろうか。東アジア以外の地域への影響は一つの「現象」と見なすにはその磁力（うねり）が弱いということが筆者の見解である。人文社会科学において、一つの「事象」を定義することは一般化という誤りを伴いやすいという短所がある。この一般化の危険性を甘受しながらも、あえて定義するならば、韓流は、「韓国大衆文化が東アジア域内の人々によって積極的かつ主体的に受容される一連の過程」として理解できる。

韓国大衆文化の東アジア内での拡散過程、すなわち韓流現象がすでに15年の歴史を有するようになった現在こそ、韓流をめぐる様々な事象を問い質すということは決して無意味ではない。現象学的興味本位のジャーナリズムを乗り越え、アカデミズムの視点から韓流を真剣に分析する時期である。「楽しむ韓流」から「研究する韓流」への発想転換が必要な時でもある。

## 2. 韓国における「韓流」言説

それでは、「韓流15年」を振り返るという意味から、その現象をめぐるこれまでの言説はどのようなものがあつたかを、韓国社会での議論を中心に論じたい。なお、周知のように、韓流をめぐる事例分析は多くなされている。本稿では、これらの再言及より韓流の本質論として充実したアプローチを試みることを断っておく。

<sup>1</sup> 崔裕梨「韓国における文化交流言説の変遷と日本：『日本大衆文化開放論議』から『韓流言説』を経て」早稲田大学大学院修士論文、2012年、29頁。

韓流は、最初から誰かによって体系的に進められた性格のものではなく、東アジアの人々によって受け入れられた極めて自然発生的な現象である。そのため、筆者は、「偶然としての韓流」、または「結果としての韓流」という表現を用いたい。起きたら突然有名になった韓流は、19世紀末、ヨーロッパの芸術界にジャポニズム（Japonism）が大流行した現象と相通ずるところがある。1867年に、フランス・パリで行われた万国博覧会で、日本の焼き物を包んだ包装紙に描かれた浮世絵がフランスの印象派画家モネによって「発見」され、そこからジャポニズムが生まれた。モネは、肝心の焼き物よりそれを包んだ些細な包装紙にむしろ日本文化の魅力を感じた。この「偶然の発見」は、その後、ヨーロッパの多くの芸術家たちに影響を及ぼした<sup>2</sup>。

韓流のもう一つの特徴は、それが「下から上への流れ」であるという点である。国交正常化にもかかわらず、対立関係が繰り返された日中関係を進展させるため、日本政府は中国国内で日流を政策的に展開しようとした。言い換えれば、日流は「上から下への流れ」であった。しかし、その後、日流に取って代わった中国国内の韓流の様子は、日流とは正反対のものであった。それは、韓国政府が先頭に立って意図的に推し進めたのではなく、韓国大衆文化と中国人民の間で交わされた民間レベルの文化的疎通であった。この「下」という視点がまさに韓流の本質とも言えよう。

「偶然と下からの革命」であった韓流の価値を後によく認識した韓国政府は、韓流という文化現象を「国益」と結びつけていこうとした。韓流を今度は「必然と上からの革命」へと持っていこうとする試みを大々的に展開したのである。政府内に「韓流支援団」を設置し、また、民間の専門家を招いて「韓流政策諮問委員会」を発足させた。日本で「ジウ姫」と呼ばれる、ドラマ〈冬のソナタ〉のチェ・ジウを始めとする有名韓流スターを「韓流広報大使」に抜擢した。さらに、韓流関連の政府傘下機関を設立させ、中国と日本などの東アジア地域にその事務所を開設した。たとえば、2001年開設の韓国文化コンテンツ振興院、2004年開設のアジア文化産業交流財団などである。日本の国際交流基金（Japan Foundation）に該当する韓国国際交流財団（Korea Foundation）も、東アジア地域では北京とホーチミンに続き、2007年10月に東京事務所を開設した（現在は臨時休業状態）。多くの政府予算を要するこれら組織の設立ブームには、韓流ブームの影響が大きく作用したと考えられる。

しかし、このような韓国政府の努力は、どうすれば韓流ブームを持続できるか、どうやってその経済的利益を極大化し、結果的に「国益」を得られるのかに焦点が当てられる。そこには、なぜ韓流という現象が東アジア地域で起きたのか、どうして東アジアの人々が韓流を受け入れたのかという本質的な問題に対する冷静な分析はなかなか見当たらない。ひたすら、関心事は専ら、韓流を利用して「大韓民国」という国家イメージを

<sup>2</sup> 三星経済研究所編「Issue Paper 韓流持続化のための方案」韓国語、2005年、55-56頁。

一段階アップグレードさせることにあった。金大中政権（1998～2003）や盧武鉉政権（2003～2008）とは異なる保守政権の李明博政権（2008～2013）の場合、韓流という用語を前の政権よりは使わないものの、文化を重要な国家産業として認識し、国益に結びつけようとする試み自体は変わらなかった。そのキャッチフレーズとして使われているのが、「国格」という用語である。文字どおり、「国家の品格」を最大限格上げさせるということがその趣旨である。その一環として、2009年3月に、「国家ブランド委員会」という大統領直属諮問組織を発足させた。同委員会は、韓国の国際社会における地位が実際より低く評価されているという「コリア・ディスカウント」（Korea discount）を克服し、当時33位程度であった国家ブランド指数（National Brand Index）を世界ランキング15位まで引き上げるといった目標を掲げた。

しかし、文化と国家イメージとの関係はそう簡単に設定できる性格のものではない。異文化同士の相互交流が、必ずしも該当国家のイメージ改善につながるわけではない。文化の他者たちが韓流という文化を楽しむことで、彼らが必ず「大韓民国」に良いイメージを持つという保証はない。韓流の影響が韓国に対する認知度とイメージの向上に多少は役立ったということは否定できず、これを裏づける統計もあるが、必ずしもそういった側面だけがあるとは言えない。この問題意識と関連して、小倉紀蔵がいくつかの著書で明らかにした解釈が非常に興味深い。それによると、韓流を楽しむ日本人中年女性の中には『産経新聞』を読む右派的な人々が意外に多いという<sup>3</sup>。韓国文化社会論に精通した同氏の先験的な判断から得られたこの解釈の事実性は別として、日本人女性たちは韓流を文化として楽しむことはあっても、自身の政治的信念までを大韓民国という国家のイデオロギーに合わせはしないということはその示唆するところが大きい。韓流文化の受容＝国家（韓国）イメージの改善が必ずしも成立するわけではない。

しばしば、ヨン様一人が（筆者はそれ以上だと思われるが）駐日韓国大使100人に匹敵する存在感と意味を持つと言われる。ヨン様と韓流の存在は、民間レベルの親善大使として言葉では言い表せないほどの大きな役割を果たしているのである。このような韓流ブームに便乗し、文化とは全く無縁の政治家たちまでも韓流を話題にしたりする。ヨン様の100分の1に過ぎない駐日韓国大使（または駐韓日本大使）も、公式行事で韓流の話からスピーチを始めるのが定番となっている。小泉純一郎・元日本首相も自分をヨン様になぞらえて、「純様」と呼ばれたいと有権者に訴えたことが記憶に新しい。盧武鉉・元韓国大統領は2007年に北朝鮮の平壤を訪問し、金正日との首脳会談を行った。その時、金正日が韓流ファンであるという事実を事前に知り、ドラマ〈宮廷女官チャングム〉で知られている韓流女優のイ・ヨンエのDVDを金正日にプレゼントした。その際に、DVDの内容に関する説明まで付け加える「親切さ」を見せたという。韓流が、南北の境界で

<sup>3</sup> 小倉紀蔵『日中韓はひとつになれない』角川書店、2008年、125-134頁。

ある38度線を越えて北朝鮮まで流れていった。彼らは、場を和ませる文化の魅力を政治的に利用しようとした。

純粋な大衆文化の国境を越える交流に対して、行き過ぎた国家主義の介入は、その副作用を起こす要素が常にある。国家（政府）は、人々の活発な文化交流に関する関連規制を最大限緩和させたり、インフラを構築したりするなど、「見えない所で静かに支える役割」で十分である。国家権力が前面に乗り出すなどの、度を過ぎた人為的な介入は、韓流に冷や水を浴びせるという逆効果を招きかねない。

趙韓恵貞は、韓国社会における韓流の議論が民族主義的な傾向を帯びすぎている点を指摘する。韓流が「大衆文化」ではなく「韓国文化」であるということに傍点をつけており、この「韓国文化がいよいよ中心部に進入し、東アジアの人々の羨望の対象となっている」といった民族的自尊心の回復と結び付けているという<sup>4</sup>。金賢美も、東アジア地域内の韓流熱風に対する韓国社会の行き過ぎた興奮と熱望は、現象を歪曲し、その歪曲された解釈に基づいて文化的優越性と経済第一主義を強調する言説が生まれてしまった。これらの言説は、韓国社会の内部では有効であろうが、国家の境界を越えるとその意味はなくなると強調する<sup>5</sup>。

19世紀末の浮世絵のように、注目されてこなかった韓流が周辺から中心の文化へとシフトした（しつつある）ということは励みになる現象であり、韓国社会が興奮するのも理解できる。これまでの韓国大衆文化は、長きにわたって中華文明の影に遮られてきており、近代においては日本帝国主義の植民地文化をいやおうなく強いられ、さらに現代期にはハリウッドに代表されるアメリカ文化に圧倒されてきたため、正当な評価を一度も受けることができなかった。これを考慮すれば、東アジア地域に広がる韓流現象のダイナミズムに対する韓国社会の興奮は理解できないわけではない。しかし、この興奮は、韓流の本質を見えにくくさせる一種の錯覚現象を起こしやすい。韓流を国益、資本、民族という概念と結びつける偏狭な論理的飛躍がされやすいことを指摘したい。

一方、韓流とソフトパワー（soft power）論との関係についての見解を少し述べておきたい。一部では、韓流をソフトパワーという概念と結びつけて（またはその一部と混同して）認識しようとする動きがある。筆者は、両者を無理に結合させることに対しては批判的である。周知のように、ハーバード大学のジョセフ・ナイ（Joseph S. Nye）によって提案されたソフトパワーの概念は、アメリカの国益論理を代弁する外交戦略の一つであり、純粋な大衆文化交流である韓流とはその本質的な性格を異にする。このソフトパワー概念を無批判のかつ盲目的に追い求めることにより、韓流がその主体性を喪失し、ハリウッド文化の亜流に転落する可能性さえもある。また、韓流が「パワー」として捉えられてしまう危険性を、われわれは常に意識する必要がある。その捉え方が、異質的

<sup>4</sup> 趙韓恵貞ほか『文化研究叢書3：「韓流」とアジア大衆文化』延世大学出版部、韓国語、2006年、14-15頁。

<sup>5</sup> 同上、156-157頁。



な文化を排除し、文化優越主義や、文化帝国主義、自文化中心主義といった論理へと流れる可能性を想定することができる。ナイは、韓国、日本、中国を中心とする東アジア各国での講演などを通して、それぞれの国が持つソフトパワーとしての魅力を褒め称える発言をたびたびするなど、ソフトパワー戦略を本人自らが巧妙に駆使しているように思われる。

以上、韓流に関する既存の言説について多少批判的に考えてみた。これらの事実にもかかわらず、韓流は、韓国（人）にとって自文化に対する自己省察の機会となった。さらに、東アジアを見る視野を拡大させる契機ともなった。これらは非常に肯定的な現象である。韓国では、「東アジア＝東北アジア」という認識がきわめて強く、これまで排除されてきた東南アジアへの「無知」と「無関心」を、韓流がある程度自覚させたと考ええる。これらの動きは、地域化をめぐる議論が活発に行われている中で、東アジアを見る視野の幅を広げる面において非常に望ましいことである。

### 3. 日本における「韓流」言説

筆者は、現在、学習院女子大学の「朝鮮文化論」（春学期）という講義を担当している。その期末レポートとして、韓流に関する内容を纏めたものから、非常に多く学生たちの同現象への関心を容易に窺うことができる。しかし、授業の中では「韓流は東アジアに広がる文化現象」と強調したにもかかわらず、それぞれのレポートにおいては「日本で広がる韓国大衆文化」と認識する学生たちが意外に多かった。学生たちは、「東アジアの中の韓流」よりは「日本の中の韓流」というイメージをより強く持っているのである。これは、学生たちが「東アジア」というより大きな枠組みの中で韓流現象を見る認識自体がまだ不十分であると解釈できるが、一方では、日本における韓流の影響がそれほど強力であるということをおがわせる。

例えば、(1) 韓流ドラマ〈冬のソナタ〉がNHK放送で記録した最高視聴率、(2) ヨン様の訪日に合わせて成田空港に殺到したファンたち（空港設立以来最大規模）、(3) 字幕や吹き替えに頼らずに韓流ドラマの深い意味を少しでも理解するために起きた韓国語学習ブーム、(4) ヨン様が住む地域を直接見たがる日本人の中老年女性たちの韓国訪問ラッシュなど、韓流が日本社会に投げ掛けた衝撃と波紋は、紙面を割いて一々説明するまでもない。日本での韓流は、「シンドローム」そのものであった。この「シンドローム」は、〈冬のソナタ〉が初めて放映された2003年4月ごろに比べて多少沈静局面に入ったが、これを言い換えれば、すでに韓流は日本人の「生活の一部」として定着しているという理解もできる。

また、意外な所で韓流を発見する。日本の大手デパートだけでなく、小さなコンビニの隅をキムチが占めているのである。電車で韓国人が乗ると「キムチ臭い」という無言

の視線を送っていた日本人たちであったが、今では「キムチ無しではいられない」という人もいる。これとは対照的に、韓国では、キムチの消費がますます減っており、子供たちが最も嫌う食べ物の一つとなっている。さらには、輸入キムチも流通しているのが現代韓国の一自画像と言えよう。キムチ消費の逆転と共に、貧乏な学生やサラリーマンが気軽に立ち寄る牛丼の「松屋」は、いつからか、類似韓国料理がメイン・メニューになっている。そのメニューとは、ビビン丼（ビビンパ+牛丼）、豚焼肉定食（豚丼+焼肉）、キムカル丼（キムチ+カルビ+牛丼）、豆腐キムチチゲ（豆腐+キムチ+チゲ）などである。キムチもサイド・メニューとして人気を博している。松屋がまるで韓国料理店のような錯覚さえ呼び起こすほどの、松屋の和食と韓食の調和には驚かざるを得ない。このように、韓流は日本人の食生活にまで浸透している。

日本では、韓流を「かんりゅう」と音読みせず、韓国や中国と同じく「はんりゅう」と発音する。これは、韓流が東アジアの中で共通の文化として共有される同時性と同質性を確保しているということの意味する。しかし、その同質性を受け入れながらも、日本の中の韓流はまた異なる様子を帯びている。日本での韓流は、他地域での韓流と同様に独自のものである。

毛利嘉孝は、日本で受け入れられる韓国大衆文化を「日式韓流」という言葉を用いて表現している。また、その「日式韓流」の特徴を「主体的で経済的な消費」と規定する。戦後の日本社会は、高度な資本化・組織化が行われた個体社会と特徴づけられ、その社会の中で生き抜いてきた日本人（特に現在の中高年女性）は「関係の喪失」と「自我の疎外」を経験してきた。彼らの喪失された関係と疎外された自我は、韓流文化を通じて、または韓流を主体的に消費することによって慰められる。こういった社会的背景が、「日式韓流」形成の土台となったという<sup>6</sup>。

白元淡は、毛利の見解を受けて「日式韓流」を次のように説く。すなわち、日本における韓流は洗練された郷愁（ノスタルジア）の消費である。香港と台湾を除く中国と、東南アジアにおける韓流は近い未来への先験である。開発途上国における韓国と韓流は、アメリカや日本のように遥かに遠い未来ではなく、手をつかめるほど近い、成し遂げられる希望である。しかし、日本における韓流は、文化的周辺とされた人々が、日本社会という閉鎖回路の中で振り返りたい過去の再現欲望を満たす契機である<sup>7</sup>。我を忘れて戦後を生きてきた日本人が失った“何か”を埋めるため、韓流を主体的に消費している。その意味では、ヨン様もその消費の「対象」である。こうした日本における韓流は、いつも肯定的な評価のみを受けるわけではない。以下では、日本社会における二つの韓流批判論を紹介する。

一つは、「韓流期限論」である。「韓流はもう終わった」、「楽しむ分は楽しんだので、

<sup>6</sup> 毛利嘉孝「日式韓流」せりか書房、2004年参照。

<sup>7</sup> 白元淡「東アジアの文化選択：韓流」図書出版ペンタグラム、韓国語、2005年、332-333頁。

もう飽きた」という話である。すなわち、韓流を一時的に過ぎていく流行のように認識することである。前述したように、「15年も健在している流行があるだろうか」と、むしろ韓流期限論者らに反問したい。文化というのは、サッカーのワールド・カップや野球のワールド・ベースボール・クラシックの日韓戦のように、勝負をしたり、けじめをつけたりするものではない。その意味で、韓流の「賞味」期限をめぐる論争はそれほど意味を持たない。韓流はすでに姿を消したのではない。日本人の、東アジア人の潜在意識と生活の中に溶け込んでいる。少しの刺激さえ加えられれば、いつでも呼び起こされて共有される「文脈」(story-telling)として位置づけられる。中身のある「バッテリー」(contents)さえ交換すれば、その「壁時計」はいつでも動き出すのである。

もう一つは、「韓流貶下論」である。これは、「韓流期限論」と共に、韓流にブレーキをかけるような批判的言説である。「従兄弟が土地を買えばお腹が痛くなる」という韓国の諺のように、日本においてあまりにも人気を博している韓流に対する嫉妬の心理がその根底に作用していると思われる。また、「嫌韓流」に代表される「韓流貶下論」には、韓流が自国文化を侵食することを懸念する牽制の心理もある。とりわけ、韓流の絶頂期であった2005年を期して、反韓流の気流もその絶頂に達した。『マンガ嫌韓流』(山野車輪著・晋遊舎刊)も飛ぶように売れ、またインターネット掲示板(とくに2ちゃんねる)では韓流を誹謗する書き込みが溢れた。「ヨン様」を「ヨン君」と呼ぶべきであると主張する週刊誌さえも登場した。留意すべきことは、この「韓流貶下論」が日本にのみ台頭したものではないという点である。中国では韓国ドラマの放送時間を制限し、台湾も韓国ドラマに輸入関税を付与する措置を取った。

これらの韓流批判論はそれで終わるのではなく、逆説的にもその批判を通じて新しい文化を創造する可能性につながるができる。その意味では、日本で起きている嫌韓流の雰囲気、台湾や中国での韓流警戒は「当然の反応」として考えられる。しかし、根拠のない嫌韓流は韓流発展の妨げになるだけであり、警戒せざるを得ない。一方、この韓流批判論の台頭には、韓国側も責任を免れない。韓流の拡散と持続だけに汲々とした結果、双方向的な交流よりは韓流文化の一方的受容のみを追い求め、韓流の一方通行が相手側の文化を侵害するというイメージを自ら与えたと考える。

以下では韓流と日韓関係について言及しておきたい。韓流が日韓関係のすべてを解決してくれるような錯覚に陥ってはいけない。韓流を美化するのではなく、「ありのままの韓流」を大切にする必要がある。日韓国交正常化(1965年)40周年であった2005年を両国政府は「日韓友情年」と定めた。韓流の雰囲気を維持し、両国間の文化交流をよりいっそう深めようという趣旨であった。しかし、こうした良い雰囲気が、領土問題と歴史教科書問題によって「日韓対立年」になってしまった。予定されていた純粋な民間交流は急遽中止され、さらには日本人観光客が多く訪れる済州島のある食堂に「犬と日本人は立入禁止」という貼り紙も登場したことは記憶に新しい。



丁世均・韓国民主党元代表の発言が興味を引く。2008年11月26日に、早稲田大学アジア研究機構が開催した第26回アジアセミナーでの演説で、同氏は「日本社会における韓流現象は日本人の心の中にある韓国（人）のイメージを大きく変化させた。ヨン様一人が何十年もの断絶の時間を埋められるという事実を確認できた。しかし、そうは言っても、一時の支配・被支配の歴史による相互不信のイメージが完全に払拭されたわけではない。互いに対する不信のイメージは両国国民の心底には依然として残っている。日韓両国間の『国交正常化』は成し遂げられたが、日韓両国民の『感情（心）の正常化』はいまだ成し遂げられていない」と述べた<sup>8</sup>。日韓両国がいくら良い関係にあっても、その関係は歴史認識をめぐる問題群によってすぐに冷え込むというジレンマを控えている。日中関係と韓中関係も例外でない。韓流が国同士の対立関係を和らげる「潤滑油」の役割になっても、完全な解決にまでは至らないという現実認識が重要である。文化と政治の「切り離し」を常に考える冷静さが求められている。

一方、近年、日韓関係を「未来指向」、「新未来」という用語（概念）で規定しようとする一部の動きがある。韓流の持つ「純粋で未来指向的な性格」が前者の「政治性濃厚な未来」議論に利用されている側面がある。日韓関係の「未来」とは、過去に対する歴史認識の共有無しでは成し遂げられないという構造的限界を持っている。「共有可能な歴史認識が不在である日韓新未来」は、白元淡の表現を借りれば<sup>9</sup>、「溝に陥ったまま、顔だけが外の陽射しに突き出している」ようなものである。韓流という肯定の文化交流現象が、歪曲された過去の歴史を正当化する材料に悪用されないことが望ましい。

#### 4. 「域際」文化としての韓流

ここでは、韓流を、韓国と日本といった国民国家の枠組みを越えて理解することを試みたい。以下の内容は、すでに検証済みのものではなく、これから考察すべき「観点の提示」である。平野健一郎は、日本国際政治学会の『ニュースレター』の巻頭言として、「求む、『国際』に代わる新しいことば」というタイトルの文を、次のように寄せている。

戦後、「国際」は新しいことばとして再登場したのである。だが、「国際」が新しく厳密に定義されることはなく、漠然と日本の「外」を指す、都合のよいことばとして「国際社会」が使われ、専門的には、次第に「国家間」を意味するものに限定されてきたように思われる。（中略）しかし、その間に現実の変化はもっと目まぐるしく進み、グローバル・イシュー、地域統合から人間の安全保障まで、「国家間」レベルにとどまらない「国際」現象が著しく増えている。（中略）「国際」ということばは時代遅れ

<sup>8</sup> 丁世均「朝鮮半島の明日」『ワセダアジアレビュー』（No. 6）2009年8月、76頁。

<sup>9</sup> 前掲、白元淡、334頁。

である。グローバリゼーションの時代、ポスト冷戦時代の第一世代に当たる第四世代には、学問の再創造のために、「国際」(international)に代わる新しいことばを創り出していただけないだろうか<sup>10</sup>。

また、岩淵功一は、近来、学界で活発に議論されている「超国家主義」(transnationalism)について、ハナーズ(Ulf Hannerz)とアパデュライ(Arjun Appadurai)の主張をもとに、わかりやすくまとめている。それによると、「超国家的」という言葉のもつ長所は、他の言葉と比較してその多様性があり、その言葉は、世界の隅々まで覆うことを意味する「全地球的」(global)という言葉よりは現実味を持つ。「国際」(international)は、国民国家という単位を前提とする傾向がある。これに対して、「超国」(transnational)は、国家の規制や拘束を容易く跳び越える資本や企業のマクロな動きだけでなく、人々の移動の加速化や、メディア・コミュニケーション技術の発達によって統制し難い、人・商品・情報・イメージのミクロな関係までもを念頭に置いている。さらに、「超国」は、国家の枠組みでは把握し難い、国境を越える文化の新しい流れ、関係、想像力が作られる点を同氏は強調する<sup>11</sup>。

平野と岩淵のこのような見解を参考しつつ、筆者は、「域際」(inter-regional / inter-local)という概念に着目したい。すなわち、韓流を、「域際」文化として認識することである。この用語は筆者が作ったものではない。学界の一部ではすでに多少議論されている概念である。繰り返しになるが、「国際」は国民国家を基本単位とする。「超国」も、「国際」よりは先んじた概念ではあるが、基本的には国民国家をその前提としている。これに対して「域際」は、「地域」と「地域」の関係性を想定するもので、より自律的かつ対等な性質を保つ発展的概念である。「域際」概念では、国家も一つの「地域」に置き換えられる。文化の移動が国民国家の管理と統制の領域を超える複雑な形で展開されるという点を考えると、世界はますますその「域際性」を帯びていくことが予想される。国民国家(nation)を単位とする「国際関係」(international relations)から、地域(region)を単位とする「域際関係」(inter-regional relations)へと、既存の「国際」秩序のパラダイムが変容していきつつある。東アジア地域も例外ではない。

このような「域際」概念に内在する力動性、交流性、対等性という性質は、国境を越える韓流文化の東アジアでの越境性を最も的確に表現することができる。韓流という事象の東アジア的意味とは、ほかならぬ「文化の地域化」への可能性を意味する。すなわち「域際」文化としての韓流である。したがって、われわれは韓流の持つ「域際」文化としての可能性を模索する必要がある。東アジアにおける文化の同質性と多様性のみを単純に強調する既存の議論を踏襲するのではなく、そのような二項対立的な構造の中では

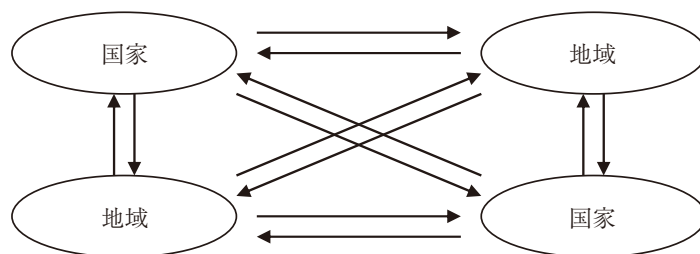
<sup>10</sup> 日本国際政治学会編『ニュースレター (JAIR Newsletter)』(No. 115) 2008年4月、1-2頁。

<sup>11</sup> 前掲、趙韓恵貞ほか、92-93頁。

共有できない、真の文化的共通性を韓流から模索する「自己省察の姿勢」が何より求められている。こうした筆者の「域際」概念を表したのが次の【図】である。既存の国家も「一地域」としてとらえ、東アジアにおける人と文化の流れがあらゆる「地域」間を活発に行き来するという、柔軟性に満ちた東アジアの「域際」関係をイメージしたものである。こうした捉え方によって、国家主義（一国主義）に基づくイニシアチブ争いや歴史認識問題も新しい観点から再模索でき、さらには、人々のための緩やかな「コミュニティとしての共同体」が東アジア地域にもできると考える。

【図】 東アジアの「域際」関係

「域際」共同体としての東アジア



人と文化の「域際」移動

(筆者作図)

一方、韓流に内在する「域際」文化としての特徴を最も的確に表現できるキーワードは「翻訳」と「混合」である。東アジアの文化的疎通の要諦は、自文化中心的な純血 (ethnocentrism) から他文化尊重の混血 (hybridism) へとシフトすることである。つまり、「文化の混合化」である。他文化と自文化との間で、正・反・合という弁証法的な統合（混合化）の過程を経て、そこから新しい文化の想像と創造が生まれ、これを通じて「東アジア文化」ともいえる新たなジャンルが誕生する。

タイやマレーシアの人々が作るチヂミ（お好み焼きの韓国版）を、日本の東京で、それも韓国人が楽しむ。これは、近未来の想像でなく、「文化停留所」である東京で、われわれが実際に体験できる現在の風景である。韓国人や在日コリアンの領域と思われがちな日本の焼肉屋も、日本人だけでなく、現在は東南アジアから来日した人々（特にタイ人）の焼肉ネットワークによっても経営されている<sup>12</sup>。このように、韓流は東アジアにおける文化混合の可能性をもたらす契機となったと言えよう。現地社会の人々の一定の「文化翻訳」という過程を経ることによって、新しい文化として変容できるというこ

<sup>12</sup> 焼肉屋に詳しい在日コリアンの証言より引用。

とを韓流は示唆する。前述した牛井の松屋も同じ論理で理解できる。そういった意味から、韓流は、一国と国家を超える複合領域にまたがる事象として認識できる。それゆえ、韓国文化＝韓流文化という等式は必ずしも成り立たない。韓流文化は、東アジアの人々による翻訳と混合の過程を経て、彼らに体化される「もう一つの韓国文化」である。

## おわりに

以上、韓流現象をめぐるこれまでとこれからを、それぞれ「国益」と「域際」というキーワードで捉えてみた。韓流という文化の越境は、近代の模範モデルである国民国家の枠組みを超え（揺るがし）、「域際」文化という新たなパラダイムやフレームを構築する“ヒント”を与えてくれた。また、韓流は、文化が常に上から下へ流れるという文化帝国主義的な固定観念を解体・破壊できるという自信感を回復させた。すなわち、韓流は下から上へという「逆流」の可能性、異質文化同士の対等な関係設定の可能性をわれわれに悟らせた。これが真の韓流「パワー」である。

韓流現象の東アジア的意味解釈が、既存の強硬な国民国家の枠組みを完全に解体できないという現実直視が必要であることを付け加えておきたい。前述した通り、「域際」という言葉は国家と対置する概念でなく、国家もその一要素として再解釈する「態度の柔軟性」が要求される。韓流はすべてを物語るのではない。東アジア地域には、韓流以外にも日流や華流などの様々な文化の流れが存在する。そのために、韓流はそれらの一例に過ぎない「実験的現象」である。

蕎麦屋「三朝庵」のおばあさんは、「韓流は、日本人が失ったものが“何”であるかを思い起こすきっかけを作ってくれた」と述べる<sup>13</sup>。それは“愛”である。一生懸命に努力する姿勢、また、それを支える周りの人々の温かい心のふれあいが韓流ドラマに反映されているという。家族を愛することの大切さを悟ったという。現代の日本人の、目上（特に父親）を立てない、言うことに耳を傾けないという伝統的な家族構造の崩壊を指摘していた。韓流ドラマには家族皆で食事をするシーンが意外に多い。これを目にした蕎麦屋のおばあさんは、昔の日本社会にもあった「家族愛」を懐かしく思ったという。このようなおばあさんの「韓流愛」は、日本という国民国家に限った「特殊性」ではなく、東アジアの人々と共有できる「普遍性」を物語っている。

時空間的な同時性を、東アジアの人々は韓流のような文化交流を通じて共有できる。そこから、互いに疎通できる「東アジア人としてのアイデンティティ」も芽生えると考えられる。確かであるのは、韓流が東アジアに住む「普通の人々の力」によって作られた文化交流活動の結果であるということである。雲のようにつかめない「虚像としての東アジア」

---

<sup>13</sup> 2009年3月31日、東京でのインタビュー。

を、少しでも認識できる「実体としての東アジア」にしたのがこの韓流現象である。文化の本質は資本でも国益でもなく、同時代を生きる人々による「交流」である。韓流の本質もここにある。最後に、筆者のこの「域際（域際関係論）」が、平野の求む「国際（国際関係論）」に代わる新しいことばとして検討されることを願う。

#### 参考文献

- 小倉紀蔵『日中韓はひとつになれない』角川書店、2008年  
三星経済研究所編「Issue Paper 韓流持続化のための方案」韓国語、2005年11月7日  
趙韓恵貞ほか『文化研究叢書3：「韓流」とアジア大衆文化』延世大学出版部、韓国語、2006年  
丁世均「朝鮮半島の明日」『ワセダアジアレビュー』（No. 6）2009年8月、76頁  
崔裕梨「韓国における文化交流言説の変遷と日本：『日本大衆文化開放論議』から『韓流言説』を経て」早稲田大学大学院修士論文、2012年、29頁  
日本国際政治学会編『ニュースレター（JAIR Newsletter）』（No. 115）2008年4月  
白元淡『東アジアの文化選択—韓流』図書出版ペンタグラム、韓国語、2005年  
毛利嘉孝『日式韓流』せりか書房、2004年

【付記】本稿は、平成18年度財団法人二十一世紀文化学術財団学術奨励金による共同研究「東アジアにおける日本のソフトパワー：韓国・中国のソフトパワーの比較研究」（研究代表者：坪井善明）の成果の一部である。ここに記して感謝の意を表したい。

（本学専任講師）